

頑張る 農業法人

「法人化したことで、近隣集落との交流も深まり、耕作放棄地の利用権設定も進められた。魅力ある農業経営を法人で行い、若い担い手を確保したい」と話す京丹波町安栖里(あせり)地区の農業生産法人、(株)みとけ代表取締役の谷口勝己さん(67)。

法人が設立されて4ヶ月を経過したところ。同社は、地域農業の発展のけん引役になろうと意欲的だ。

安栖里地区は、同町西部の旧和知町にあり、山に囲まれて自然豊か。清涼な水も豊富だ。84世帯のうち農家は約60世帯を占める。

中山間地に約35軒の農地が広がる。小規模農場が多かったため、198

1年に整備された。これをきっかけに50戸で安栖里農業共同組合を立ち上げた。水稲をはじめ、黒大豆、ハウスでみず菜などを共同作業で生産してきた。

同地区でも高齢化が進み、同組合はこのままでは集落営農を継続していくことが難しいと考えていた。「農業を次世代につなげるためには、法人化で魅力ある農業を目指そう」と昨年から検討を始めた。JA京都中央会やJA京都、行政の支援を受け6月9日、同地区の25人が出資者となって株式会社を立ち上げた。会社名の「みとけ」は、

同地区のシンボルである三峠山(みとけやま)にちなんだもの。役員は代表取締役の谷

口さんと、取締役の片山茂雄事業部長、森良行財務部長の3人。出資者で

京丹波町 安栖里 株式会社 みとけ



地域活性化に励む谷口代表取締役(中)片山取締役(右)と黒豆担当の片山隆夫さん

地域発展のけん引役

若手農家を雇用、担い手確保

引き継いだライスセクターに色彩選別機を導入した。デジタル画像処理で不良粒を除去し、良品の米作りにもこだわる。みず菜の生産には女性3人が種まきや朝晩のかん水、収穫などの作業に取り組み、周年栽培に励んでいる。同社は、今後はみず菜の漬物加工や、米のブランド化にも取り組む意向を持っている。

谷口さんは、「農業経営は大変だが、同地区や近隣集落の15戸から受託している水稲の農作業などを広めて、当社が農地保全に貢献していきたい」と話す。

「高齢化が進む中、若手農家を雇用して担い手を確保することで、地域農業の振興を目指していきたい」と、谷口さんは意気込んでいる。

▽法人所在地 船井郡京丹波町安栖里島6番地 090(3283)2783。

口さんと、取締役の片山茂雄事業部長、森良行財務部長の3人。出資者で稲8軒と、丹波黒大豆1軒、みず菜を58軒に12棟のビニールハウスで生産している。全てJAに出荷する。また、前身の安栖里農業共同組合から